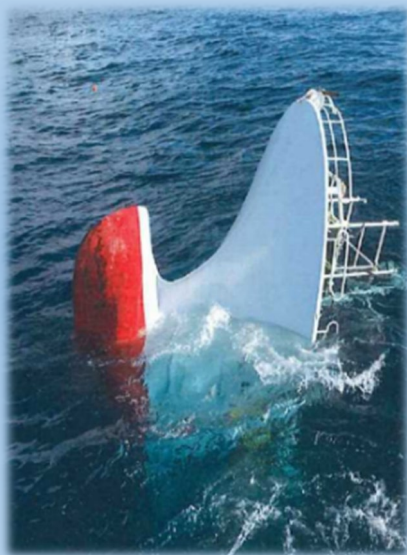


# 小型船舶の浸水事故防止 ハンドブック



令和 5 年 12 月  
公益財団法人  
海難審判・船舶事故調査協会

# 目 次

1. はじめに	1
2. 発生状況	1
(1) 船舶種類	1
(2) 浸水箇所	2
(3) 損傷状況	2
(4) 発航前点検	7
3. 事例紹介	7
① ゴム製排気管が焼損して機関室に浸水した事例	8
② ゴム製排気管が外れて冷却海水が機関室に浸水した事例	10
③ 船首が波間に突っ込み海水がハッチから機関室に浸水した事例	12
④ 大量の海水がデッキ上に流入して機関室に浸水した事例	14
⑤ プロペラ点検口から海水が流入する状態で被えい航中に沈没した事例	16
⑥ プロペラ点検窓が外れて海水が流入して機関室に浸水した事例	18
4. まとめ（再発防止策）	20

## 1. はじめに

令和4年4月、北海道知床半島を周遊する小型旅客船（19トン、乗組員2人、旅客24人乗船）が知床半島西側カシュニの滝沖を南西進中、船首部から浸水したのち、沈没し、旅客18人及び乗組員2名が死亡、旅客6人が行方不明となっています。

事故原因について、運輸安全委員会は令和5年9月に、調査報告書を公表し、「波が高まる状況下、1.0mを超えた波高の波が船首甲板部に打ち込む状態で、船体動揺によって船首甲板部ハッチ蓋が開いたため、同ハッチから上甲板下の船首区画に海水が流入して、機関室及び舵機室等へ浸水が拡大し、浮力を喪失してカシュニの滝沖において沈没した」としています。

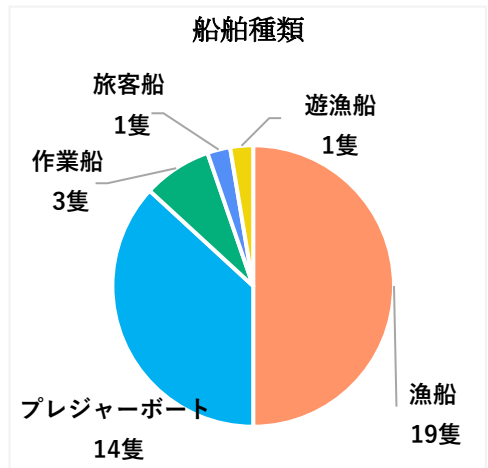
小型旅客船に限らず、小型船舶では浸水等に伴い転覆、沈没及び浸水事故に至り、尊い人命が失われ、また、船舶に重大な損害を与えることが危惧されます。

そこで、小型船舶の浸水関連事故防止のため、運輸安全委員会が公表した過去5年（2018年～2022年）の調査報告書38件（浸水22件、転覆4件、沈没12件）を整理・分析し、事故の発生状況、事故事例、再発防止策等を以下のとおりまとめました。

## 2. 発生状況

### （1）船舶種類

小型船舶の浸水関連事故38件の発生状況を、船舶種類でみると、漁船19隻、プレジャーボート14隻、作業船3隻、遊漁船1隻、旅客船1隻となっています。漁船とプレジャーボートで約87パーセントを占めています。

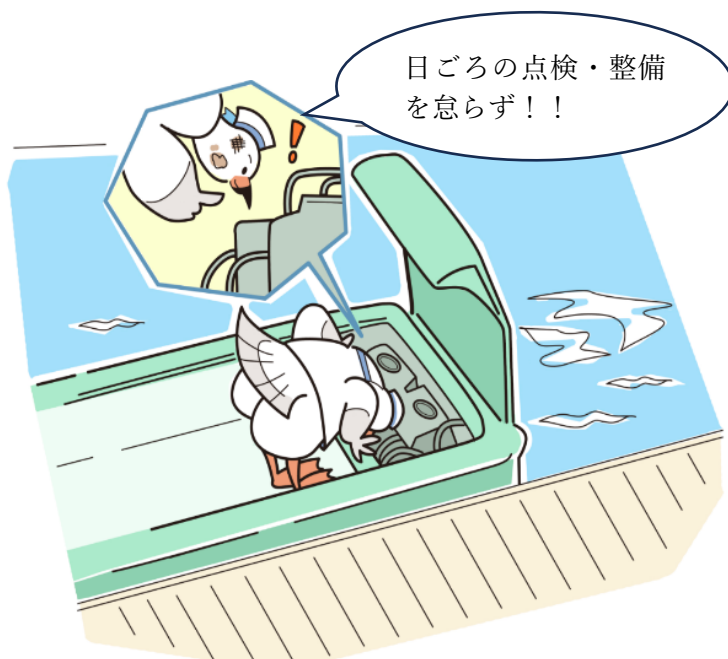


#### 4. 作業終了後の確認

- ・プロペラ点検窓を開放して作業を行った場合は、作業終了後に同窓を確実に閉鎖する。
- ・製造会社の取扱説明書に従い、適切にプロペラ点検口を使用する。

#### 5. その他

- ・船底部を確認し、擦過傷を生じていたことを認めた場合、浸水のおそれがあることを考慮して下架前に確実に修繕する。
- ・高温の排気に接する排気管等は、ステンレス等の金属製品を使用する
- ・機関室にビルジ高位警報装置を設置する。
- ・運航中止基準は、船舶の堪航能力に見合ったものにする。





海難防止への  
インフォメーション!

公益財団法人  
海難審判・船舶事故調査協会



〒102-0083  
東京都千代田区麹町 4-5 海事センタービル 5 階  
TEL 03-3512-8140 mail : kaisin-f@maia.or.jp